# ゴールドラッシュ＆ゴールデンエイジ

白金桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴールドラッシュ＆ゴールデンエイジ

【Ｎコード】
Ｎ４８７７ＢＡ

【作者名】
白金桜花

【あらすじ】
ロボット＋西部劇＋世界大戦前夜な混沌とした世界。
そんな時代でアメリカの南北戦争が終わって数年後、まだその火がくすぶってる中、
英雄ホリディ大佐の娘キャロルががんばって戦い抜く話です。

## その１（前書き）

最初の最初、こっから最後まで製作日数２ヶ月で書き上げました。
今後ちまちま手直しを加えつつ投下したいと思ってます。

## その1

自由と正義を賭けた南北戦争も既に終結して5年、アメリカも戦火から復興して、破壊された蒸気列車の車両網は徐々に修復されてきて、私たちの済むニューヨークも徴兵騒ぎとかあって昔は一人で散歩ができないぐらい危なかったけど今はすっかもうり平和。

私の名前はキャロル・ホリディ、パパはあの北軍の英雄にして最強の蒸気仕掛けの5mの有人鉄巨人である蒸機鎧（スチーム・アーマー）の使い手とされるジョン・ホリディ大佐、

私自信も民生品の蒸機鎧を用いたレース……スチームレーサーの東海岸グランプリにて去年全国一位を取るぐらいの……ま、見事なまでの蒸機鎧乗りのサラブレッドって所ね。

そんな私が通うのはニューヨークのマンハッタンにあるアイアンハート高校、しっかしまぁ本当にお嬢様高校って名前じゃないわよね……

実際お嬢様学校じゃなくてごく普通、レベルも普通の学校だけど、これは単に、パパがたたき上げで若い頃は士官学校で猛勉強して指揮官になってそれで更に蒸機鎧を駆って前線で英雄と言うべき活躍をした……

要するに努力の人だから華やかなお嬢様学校なんて見学したらその後に家で吐いてしまってそして私にこう言ったのよ。

「あんな所に居たらキャロル、お前の性根も腐ってしまう、高校はせめて普通の学校に行ってくれ」

真顔でそう言われた時は当然私は反発したわ、ママもちょっと文句の一つ二つ言ったけどパパは譲らない様子で学費はビタ一文出さないとまで言いだしたから仕方が無く、こんな普通の高校暮らしなのよね……ま、退屈じゃないからいいけど。

そんな私は今日もいつも通り朝起きてゆっくり食事を食べて、そうしていたらママに「もう行かないの？」って言われて時計を見て、いつも通り結構きつい時間だったから慌てて茶色のブレザーとチェックのスカートが可愛い制服に着替えて顔を洗い、

鏡できちんと金色のウェーブヘアーに青いくりっとした瞳、そばかすがチャームポイントの眼鏡の美少女が居るのを確認して、それで家の庭にある蒸機バイクに乗る。

学校まで向かっている道には肌にあたる風が心地よく、ヘルメットが暑苦しいのを除けばバイク通学は悪くない。

バイクはまだ世の中に出たばっかりで、一種のお金持ちのステータスみたいな所があるから珍しがるクラスメートはいいとしても、盗もうとする子まで来るのが困りものなのよね……ま、そんなのは私の自慢のアイキドーでぎったんばったんにねじ伏せたけど。

そうして私はすぐに学校にたどり着く。

「あ、キャロル姫今日も遅刻寸前？」

学校の自転車置き場にバイクを置くと、陽気な女の子の声が後ろから返ってくる。

声の主はリン・ファオン、チャイナって所からの移民みたいで黒い髪が凄い神秘的な雰囲気の子ね。

「ええ、何時もギリギリ、でもギリギリでも送れなきゃ問題ないでしょう？」私はにっこり笑って彼女の冗談を返す。

「あはは、さっすがお嬢様だ……大物だねぇ」

「大物は私のパパよ？」リンにそう返し、私はすたすたと教室まで向かう、懐中時計を見ると、残り時間はあと5分、走ればいける、そう考えた私はすぐに校内に入る。

既に教室内に生徒たちは入っているのか、廊下に人の気配はない。

ヤバい、そう私は感じ全力で走り抜ける、行き先は1年のAクラス、ドンドンと足を進め、進め、進め、そして階段を駆け上がりその看板が見え、そこに入る扉の前を通り過ぎそうになり急停止、転びそうになるけどバランスを保ちそして扉をガッと開いて――

その瞬間黒板消しがガッと目前に飛んできて、私の顔面にクリーンヒットし、体制を崩した私はそのまま倒れた。

「遅いぞお姫様！もう10分オーバーだ！」きつい男の声……私の担任、ジークベルグ先生のの声が聞こえる。

10分オーバー、それが意味することはただ一つ。

セットしてあった目覚まし懐中時計の時間が思いっきりズレていたということだった。

## その2

「このように、蒸機鎧というのは過去の文明で作られた蒸気機械であり、現にイングランドの＞ナイト・オブ・コルブラント＜やイタリアの＞セイント・オブ・アスカロン＜など、古代文明により作られた蒸機鎧を改修し、軍事利用していたことは歴史を語る上で欠かせないでしょう」

歴史の先生が蒸機鎧乗りならだれでも知っているような話を続ける、コルブラントやアスカロンなんて有名すぎてクラスの全員が知っているだろうに、と私はあくびをしながら思う。

「古代文明の蒸機鎧を改修したものを真作鎧、それらを解析し作ったものを贋作鎧と言って、近年発達した蒸気文明により大量生産が可能になってますよね、北軍を勝利に導いた＞ウェスト・オブ・ピースメーカー＜とか、あれも贋作鎧なんですよ」

そんな事誰でも知っている、それこそ異世界から来た人間でもなきゃと思ってしまう。

もっとこう、東洋の国ジパングの職人が真作鎧に負けじと魂を込め作った＞サムライ・オブ・マサムネ＜や＞スピリット・オブ・コテツ＜等のワンオフ品の名贋作鎧とか、

コルブラントと＞デスペラード・オブ・ティルヴィング＜のデザインや機能の酷似性等の話題をしないのかしらと考えてしまうけど、結局高校じゃ無理よねと自己完結をしつつ、ノートに黒板の内容を書き写す。

そんな退屈な授業が終われば昼食の時間に私は何時もの友達と一緒に学校の外にあるレストランで食事を始めた。

あったかい野菜たっぷりのフィッシュバーガーが私の好物、肉は苦手なのよね硬くて。

「でさ、ナルとジントができてるって本当？」リンが一緒に来ていたアム・マクスウェルに問いかける、アムは学校の情報を収集するのが趣味で、ついた綽名が地獄耳、敵に回せば怖いが、味方に回せば頼りになる奴ね。

「んー、できてるっていうかもう結婚秒読み？卒業したら一緒にジパングに行くんじゃない？」

ジントというのはリンとは違う、極東のジパングからの留学生、堅苦しいけど誠実な男って感じで、軍人の家計みたいで成績も優秀、こんな学校になんで来たか謎なぐらいの優等生よ。

「ジパング……チャイナの方はイングランドの傘下だけど、植民地化を拒んで大反抗をしてるのよね……」リンが色々ジパングに思う所があるのか複雑な顔を浮かべる。

ジパングはユーラシアの国家が連合を組み、イギリス主導で開国を求めようとした、ジパング政府を収めるトクガワ家はそれを？み、開国するかに思えた矢先、ジパングの各州でクーデターが発生、

電撃的に政府を奪い取り、ユーラシア国家の駐留する飛空船団に蒸機鎧で襲撃をかけ撃破したというニュースはこのアメリカにも知れ渡った。

そのニュースによる衝撃的な内容は飛空船団の壊滅に蒸機鎧が使われた所、通常蒸機鎧は跳躍しても１０ｍしか跳べない、カノン砲を持てば撃墜できるけど、このニュースでは写真つきではっきりと蒸機鎧が「飛んでいた」のが問題だったの。

飛行可能な蒸機鎧は真作鎧なら何個かある、だけど写真にははっきりと普通の贋作鎧とおぼしき機体がカタナと言われる刀剣で破壊しているところを捉えており、それはそう、ジパングの蒸機鎧技術がアメリカやユーラシアよりも進んでいるという事でもあった。

つまり、軍事力に関しては上と言って良いほどの連中にユーラシアは喧嘩を売ったわけね、結果ジパング国内は沸き立ち、むしろ白人による支配解放を名目にフィリピンやアジア各国の白人企業に対し攻撃を始め、

解放した地域の人間と遺志の疎通を図り、大規模なアジア圏の武装勢力を築き上げ、今チャイナはユーラシアから来た白人たちの最期の砦と化しているって話よ……ま、お父様曰く、植民地を圧迫しすぎた自業自得らしいけど。

実態は単に、ジパングの人間が白人になり代わってるだけなのだと私は思うわ。

アメリカはこの戦争に参加するように要請され、南軍はそれを支持していたが北軍は拒否、結果南軍にはユーラシアから大量の支援が来たけど、

それが仇となって、またユーラシアに隷属する気かと反発した南軍の人間が大量に裏切り、指揮系統が崩れた所を叩かれ南軍は潤沢な補給があるにもかかわらず劣勢になり、南北戦争は終結した。

当然、圧勝ってわけにもいかず戦費を使いすぎた私達北側はそれを口実に参戦拒否、噂だけどアメリカの自由と尊厳を守る精神に乗っ取り、ジパングに大量の軍事支援をしてる話まであるわ……パパに聞いたら鼻で笑われた、その程度の話だけど。

「さながらアジア大戦ね……」私はこの状況を形容するに相応しいと思った言葉を言う。

「ま、アメリカは中立って言ってんだしジントもスパイで捕まってない、別によくね？」そうアムはあっさりした感じで言う、確かにどうでもいい、外国同士の戦いでアメリカは参戦する気は無いから。

私が興味あるとしたら、ジパング製の蒸機鎧に凄い乗ってみたいというだけ、それも名贋作と言われたものに、真作鎧に匹敵するスペックを持つという贋作鎧、それが３００年前から既にあったと言われる話、私みたいな蒸機鎧大好きっ子にはたまらない話題ね。

だから私はこう思う、ぶっちゃけジパングと同盟組んでジパングの蒸機鎧をとっとと輸入してほしいと。

そうすればパパが試し乗りに買ってきたのを乗れて、このニューヨークの空を飛んで回れるかもしれないからだ。

## その3

午後の授業は体育が2時間連続、体育は得意な私は男子顔負けの成績をドンドン出し、

それが終わったら私はバイクで帰宅しようと、バイクにキーをかけようとする。

「あ、キャロルー」そんな矢先にアムが私の方に駆け寄ってくる音が聞こえた。

「何？」私はアムの方を向くと、後ろにはリンも居た。

「ん、買い物行かない？新しいグッズ店見つけたのよ」にっと笑いながらアムは言う。

「新しいお店ね……いいわね、行きましょう？」別に帰ってもやる事なんて本を読むぐらいだし、

今日は蒸機鎧の訓練の日じゃない、要するに暇な日だった私はアムの誘いに乗る。

「うんうん、持つべきものは友達よねぇ」リンが納得した様子を浮かべる。

「……生憎だけど、私は何も買ってあげないわよ」うん、こういう時のリンの態度はわかりやすい、

何か奢ってもらうつもりだと察した私は、釘を刺す。

「う、ケチー……」むーっと膨れるリンを気にせず、私はバイクのエンジンを切った。

街中にバイクなんて置いたら一瞬で盗まれるからである。

そうして私達は、ニューヨークの繁華街に向け足を進めた。

繁華街はいつもいろんな人が居る、多種多様な移民で構成されるアメリカ、

それも南部の奴隷解放運動の後は黒人やアメリカの原住民であるインディアンも町でちらほら見かけるようになった、

私はどうでもいいけどテレビじゃそれに対する反感を持った、元南軍の人間が犯罪を行っている話をよく聞くのは憂鬱ね。

…

……

……

「うー、バイクで行けばよかったわね」かれこれ繁華街を一時間ぐらい歩いている気がする私は、いい加減バイクに乗っていけばよかったと後悔する、

どうせ鍵を壊せる人間なんて居ないし、蒸機鎧を使って盗もうものならすぐバレるからだ。

「あはは、キャロルのバイクなら荷物持ちもできるしね？」リンが笑って返す。

「そうね、でもそれにしても一体いつつくの？」

「あー、こっから路地裏に曲がるわけよ」

「路地裏？」アムの言葉に嫌な予感がする、路地裏は治安がかなり悪く、スラム化している場所もそれなりに聞くからだ。

「大丈夫大丈夫、スラム化してる場所は通らないって」アムは私が心配したのを察したのか、笑って返す。

本当に大丈夫なのだろうか、そう思いつつも私達はアムの案内通り、路地裏に足を進める。

路地裏は薄暗く、ニューヨークの高層ビルの間にありまだ日は登っているというのにまるで夜のように不気味だった。

「本当に大丈夫なの？」私は再度、アムに聞く、いくらなんでも雰囲気が悪すぎだと。

「大丈夫だって、キャロルってホント、そういう所はお嬢様なんだねぇ」にやにやとアムは笑う。

確かにホリディ家は戦争の英雄で私の家はお金持ち、良く言えばアメリカンドリームの体現者、悪く言えば成金、まぁアムにとってはどっちでもどうでもよく、私はお金持ちのお嬢様なんだけど。

「リンも言ってあげてよ……」前を進むリンに私は声をかける、流

石に嫌な予感がする、アイキドーは確かに優れた武術だけど、体格差がある相手と闘うのはそれでも危険だ。

「心配しすぎだって、大体アイキドーがあるなら大丈夫でしょ？」ダメだこれは、そう私は実感した、こうなれば毒も食らわば皿まで、そう考え、周囲を見回し警戒する。

見回すと後ろに一人、堀の深いラテン系の、小太りの体格のいい中年男性が居た、男はコートを着込んでおり、葉巻に火をつけ、私と目をあわせたがすぐに目を逸らした。

それ以外に特に人の気配は無く、達は私は路地裏の奥に置くにと進んで行く。

進んで行く途中、空が何かに覆われたのか更に暗くなり上を見上げたら、そこには巨大な８つの可動式ジャイロを側面に搭載した飛空艇が飛んでいた。

「凄い低空飛行だねぇ、キャロル、何処のか知ってる？」リンは私に聞いてくる。

「私の専門は蒸機鎧よ、だからどこの飛空艇かは解らないわ？」正直に私は返す、と言うか、何で私が飛空艇について知っているって思ったのか謎だ、

ひょっとして私って格闘技大好きの軍事オタクのように見られているのかしらと思ってしまう。

飛空艇が通り過ぎたのを確認すると、後ろからガサッと言う物音が聞こえた。

咄嗟に後ろを向く。

さっきの、小太りのトレンチコートの中年男性が居た。

彼はゴミ袋に足をぶつけ、私の視線に気づくとさっと顔を逸らし、今度は変な板みたいなものを触っていた。

尾行している？そう私の直感が告げる、だが、何が目的かはわからなかった。

「ねぇ、リン、アム……」私は2人に声をかける、尾行されているとしたら人さらいかもしれない、そうなったら最悪……うん、凄い考えるのも嫌な事態になっちゃう。

「何？宇宙人でも見たの？」リンだ。

「ち、違うわ、後ろの男の人……その……さっきから私をつけてるみたい」

「……あのおじさんが？」リンは特に怖気づかず、後ろに居る男に指差す、男は特に動じることなく、またあさっての方向を向き葉巻を吸っていた。

「うん、何かわからないけど人さらいかもしれないわ」

「ホント、怖がりねぇ……じゃ、こうしようか」アムも危機感の無い、あきれた様子で語る。

私も少しその態度には怒りたくなったけど、ここで怒っても意味

がないので、怒りを堪える。

「全力でであたしが走るから、リンとキャロルはついてきてよ……はい！3、2、1、スタート！」そうにこにこと笑みを浮かべた後、走り始める。

「ま、待ってよー！」リンもそれを追っかける形になる。

「ああもう！ちょっと！」置いてけぼりになったらまずい、私もそれに続け2人を追いかけるために走り始めた。

## その4

「はぁ……はぁ……はぁ……ついたよ」

アムが体力を使いすぎたのか走り終えると、激しく呼吸を行い続ける、

「うう、へとへと……何でキャロルちゃんそんなにバテてないの」

リンもけろりとしている私に、疑問の言葉を出す。

私としてはあんまり体力を使った訳ではないけど、リンもアムもかなり疲れているみたいに見えた。

「鍛え方が違うのよ、鍛え方がね？」私はそう笑顔で言った後周囲を見回し尾行が居ないことを確認し、

安心するとその後目的地のお店と思わしき看板を見る、ファンシーできれいな装飾がされた、ポップなオカルト系グッズショップだった。

＞イドリス魔法雑貨店＜そう看板には書かれており、イドリスという人が店長なのかなと考える。

「とりあえずついたし、店長のお茶でも飲もうよ……」そう、へとへとのアムは体を動かし、お店の扉を開けて入る。

私もそれについて行くように、お店の中に入った。

お店の中は煌びやかなオイルランプが天井に吊るされており、さま

ざまというか雑多でごった煮な、

どっかの部族のお面が売ってあると思ったらチャイナ系の壺が置いてあったり、かと思ったらジパングの刀置いてあったりと統一性はないけど、何処か居心地のいい場所だった。

そしてその奥に何個かの円形のテーブルが置いてあり、そこに店長と思わしき人が居た。

「あら、ごきげんよう」それはアラブ系の褐色の肌、金色の美しい髪の、２０歳ぐらいの女性だった、

尖った長い耳がまるでファンタジー小説の住人のような神秘的な感じのする人、そう私は感じたわ。

「すみません、休ませて～」アムはふらふらと奥の椅子に腰をかける。

すると店長は奥からティーカップを持ってきて、すぐにお茶を入れてアムに渡したわ。

アムはごくごくとお茶を飲み、リンもそれにつられてアムの向かいの席に座ると、店長は同じくお茶を差し出した。

「貴方はいいの？キャロル・ホリディさん」店長は私の名前を言い当てた、ドキっとした気分に私はなる。

「な、何で名前を？」

「そうね、これでも魔女だからかしら？」手品師や魔術師というの

を私は全く信じなかったけど、いきなり名前を当てたというのは流石に驚く、

けど、アムの知り合いならアムが私の名前を言ったのかなと私はすぐに思って、これ以上の詮索は怖いからやめようって結論づけたわ。

店長さんはすぐにお茶の入ったティーカップを私に近づいて渡す、ティーカップは冷えていて、どこかの異国のお茶なのかと私は思った。

「水出しの麦茶よ、ジパングの商品なの」

「このお店、ジパングのものが多いですね」

「そうね……私の恋人もジパングの人だったから、かしら」店長さんがそう言う顔は、どこか寂しげであった、恋人と別れたのかな？と私は結論づけ、詮索はよそうと決めた。

私も椅子に座り、お茶を飲む、冷えていていい気分になるお茶だった。

「それで貴方は、どんな魔法がお望みかしら？」向かいに座った店長さんが私に聞く、

魔法、と言われても私はそんなご利益に縋るような立場では今は無いというのに。

「そうですね……うーん……」

「……貴方は今日が運命の日になる、その決断で貴方は死ぬかもし

れない、生き残るかもしれない、死ぬよりも酷い業を背負うのかもしれない、

けど、死を望まないで、前に生きたいのなら少しの手助けをすることは出来るわ」そう、店長さんは真剣な顔で言った。

こうして近づいて見ると、店長さんの顔は私と同じぐらいにあどけなく、金色のロングヘアーがどこか大人びた雰囲気を出しているだけだと気付く。

けど、私と同い年ぐらいの筈なのに、どこかその言葉には重みみたいなのが感じられて、本当にこの日が運命の日なのかと思えてくる。

「……10ドル、10ドルで一つだけ、貴方が欲しいものを売ってあげるわ」そう店長は言う。

そこまで売れていないのだろうかと私は考えるけど、それにしては妙に煌びやかで余裕が感じられ、そういう訳ではないことを認識する。

そして私は椅子から立ち上がり、店の中を物色する。

店には様々なものが並んでいた。

蒸気仕掛けの小型自動舞踏人形。

琥珀色の望遠鏡。

ダマスカスのような模様の出した、切っ先があまりにも鋭すぎて恐怖すら感じる、神秘の短剣という札が貼られガラス箱のなかに動か

しても刃がどこにも当たらないように皮で拘束された短剣。
真理計という札が貼られたよくわからない黄金の羅針盤のようなもの、様々なよくわからない、けど神秘的なものがあった。
でも私が欲しいものとは違い、私は何かを求めていた。
何かはわからない、けど探して、様々な所を見て、そして、一つの赤い箱を見つけた。
これだ、これに違いない、そう、私は直観的にその箱が必要とするものだと感じていた。
赤い箱を開く、その中には銀色の、ガラスか何かで覆われたプレートのようなものと、一枚の写真があった。
どこか解らない草原で、白黒じゃなくて色のついた写真で、まだ髪がセミロングで本当に私より年下みたいな店長さんと、２０歳ぐらいの髪の長い黒い髪の、綺麗なジパング系の男の人……多分、店長さんの言った恋人の写真があった。
「……えっと、これって？」色のついた写真というだけでも驚いたけど、その写真は既にぼろぼろになっていたということ、つまり何十年も前のものだと言う事に、常識外の何かを感じた。
「魔法の板よ、その写真の彼が使っていたの」そう、店長さんは言った、開けてはならないものだったのかと私は考え、すぐに箱の中に中身を入れて閉じた。
「ご、ごめんなさい！」私はぺこりと頭を下げ謝る。恋人の形見は

危ない、ほんとうに危ない、いくら偶然でも、プライベートなものまで開けちゃった事に罪悪感が湧く。

「……いいのよ、写真はダメだけど、そのプレートと箱は貴方が持っていきなさい、既にそれは目的の終えたもの……彼ね、旅に出たのよ。彼は罪を背負っていて、それを清算するために戦おうと考えたのよね……私にはもう、何も縛られなくていいなんて言っておいて、彼は自分の罪に縛られ、清算しようとして戦いの旅に出たわ……でも、何年経っても帰ってこない、それも当然だけど、私はこうして待っているの」

「そんな物なのに……いいんですか？」

「ええ、１０ドル払えば構わないわ、それが貴方の運命の鍵なら、私はそれを渡すだけ、彼が私と同じ状況に遭っても、きっと、渡していた筈よ」店長さんはそう言うけど、重たい品物だった、けど、運命のカギと言う言葉、そしてこの箱を見つけた時、これだと思った。

私は学生鞄から財布を取り出し、１０ドルを渡す、１０ドルを受け取ると店長さんは箱から写真を撮り出し、私に渡した。

「貴方の運命に幸運と、ハッピーエンドがあらんことを」そう、店長さんは受け取った私に言った。

## その5

その後は店長さんと、リンとアムと4人で多少の世間話をして店から出て行った。

「それで、店長さんに何貰ったの？」リンは私に聞いてくる、私はそう言われると、箱を取り出した。

「うーん、こんなものね」

「箱？」アムがその箱を見て言ってくる。

「ええ、それにこれ」そう言いながら私は箱からプレートを取り出す。

「プレート、ねぇ」アムはじろじろとそのプレートに近づいて観察をしたが、すぐに飽きて首をひっこめる。

「よくわからないけど、何かお守りみたいなものみたい」そういえば勢いで推されたけど、結局これが何なのかはわからない、

それぐらいは店長さんに聞いておくべきだったと少し後悔しながら、プレートを観察する。

よく見ると中にある金属部分に細かい何かが刻まれていて、それでいて金属部分は何層にも重ねられている、

また外側の覆ってる透明なものはガラスよりも触った温度は高く、傷ひとつ無かった。

プラスチックにしては妙に硬さがあって、そして重さがある、やっぱり何かのお守りなのかしら？

少し考えたけど結論は出なく、私はすぐにプレートを懐のポケットにしまう。

「うむむ、いったいどこの文明なんだろ……真作鎧のあった文明の品だったりして」リンの言葉で、確かにその時代のものの可能性はあるなという考えが出てきた。

写真にしても真作鎧があった文明なら、あんな鮮明な写真が作れるだろうし、プレートにしたって真作鎧のどこかの部品の可能性だってある。

店長さんの恋人も、きっとジパング系の人で今戦場に居るだけ。

でも、だとしたら何であそこまで大切に保管されていたみたいなのに、ボロボロになっていたんだろう……私がそう考えていたその時だった。

ドンっ、そう、前に居たアムが誰かとぶつかった。

「あいたたた、す、すみま……」私も、アムも、リンも絶句していた、ぶつかったのはいかにもなサングラス姿の紫のスーツを着たマフィアの男、

そしてその左右にはガラの悪そうな男が2人居た。

「……あ、アム？ここってこういう人居ない筈じゃ――」リンが怯

えた顔でそう言おうとした次の瞬間。右側に居た男がオートマチック銃を取り出し、銃声が鳴った。

「え……あ、ぎぁぁぁぁぁぁ！」弾丸はリンの足に当たり、激痛にのた打ち回る。

私の頭の中では恐怖が支配され、言葉が出ない、出たら殺されると本能が告げ、腰が抜けへたり込む。

「うるせぇシナ女だ……」右側の男はまるで、リンをゴミのような目で見て、もう一発拳銃を撃とうと、彼女に向ける。

だがその銃口ははリーダーと思わしき紫のスーツの男の手に遮られた。

「親分？相手は麻薬欲しさに誇りを売ったチャイニーズですぜ？こんなゴキブリ女殺しましょうよ！」最悪の形容詞だった、

私の友達をそんな風に言うなんて、でも、文句を言ったら私も殺される、そういう気分でいっぱいで、口に出そうにも出せず、涙だけが出てくる。

「我々の目的はなんだ？言ってみろ、チャイナ狩りじゃない筈だが？」紫スーツの男の人はそう、右の男に強く言ったわ、すると、右の男も大人しく銃を下た、少し安心したけど、それでも、また怖かった。

この男に今、命は握られているから、助けてと叫びたい、でも、周囲には人気が全く無かった。

スーツの男は私達に一歩、また一歩と近づく。

「さてとお嬢様、先ほどの部下の無礼を失礼、少し……我々と一緒に港にでも行きませんか？」

男はそう、温和な風に私の目の前で言う、けど、それに拒否権は無かった。

逆らったら殺される、そう、さっきの銃弾で私達は完全に心を死の恐怖に支配されていた。

動くことすら、できなかった。

「……沈黙は了承、さて、それならこのお嬢様方を連れていくとしようか」そう、紫のスーツの男がそう言うと、私の後ろからがっしりと、痛いくらいに誰かが掴む、けど、私は抵抗できなかった。何も、そう、何も。

流されるままに私達は縛られ、車のトランクに入れられ、そして、エンジンの音が響く。

私とリンとアムは別々の車に乗せられ、闇と肉体の拘束、そして銃の恐怖が体を支配して思うように動けず、震え、そして気づけば私は失禁していた。

この時は恥ずかしい何て事は考えてなかった、ただ、凄い怖かった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4877ba/

ゴールドラッシュ＆ゴールデンエイジ

2012年1月14日20時55分発行